

プロローグ

「君との婚約を破棄する！」

婚約者のアルヴィンから学校の中庭に呼び出され、いきなりとんでもないことを宣言された。

彼の隣には、乳首が半分見えるくらい制服のブラウスをはだけている、胸と尻が大きなモブ女。

アルヴィンにしなだれかかるように、腕を絡めてクスクス笑っている。

（えっ、なんで!?)

まさに青天の霹靂である。確かにアルヴィンのことは、ちょっとモラハラ気味でこつちをやたらバカにしてくる、男尊女卑精神に溢れた

いけすかない奴だと思つていたけれど。

まさか婚約破棄をされるとは思つてもみなかった。

前世で会社員として上司からの数多のパワハラ、セクハラを受け流してきた私にはアルヴィン程度のチクチク言葉によるお上品なモラハラなんて大したことないしと、笑つてスルーしてただけけれど。

もしかして、それが氣に食わなかったのだろうか。

そういえば「君はいつも正論しか言わなくてかわいげがない」と嫌味を言われたことがあったので、めそめそ泣いて虐められていた方が彼の好みだったのかもしれない。

（一応理由は聞いておこうかな……）

すう、と息を吸い込みつとめて冷静に尋ねる。

「なぜわたくしが婚約破棄されないといけないのか、理由を教えてください」

下さいませ」

「理由？ そんなの決まってるだろう。性の不一致だ！」

（はあああああああゝ!!）

——自分がプレイしていた18禁乙女ゲーム『ドスケベ学園♡♡愛欲のプリマヴェーラ』の中に転生したことに気づいたのは、十才の時だった。

悪役令嬢として破滅の運命にあると知った私は、なんとか破滅ルートを回避しようと頑張ってきた。

この作品はシリーズものなのだが、共通して言えるのは——セックスが最も尊ばれる世界だということ。

セックスの乱れは心の乱れ。相手を思いやるエレガントなセックス

こそが至高。

セックスに対するマナーも厳しく、外交で最も重視される程だ。

貴族の子女は生まれた時から婚約者が決まっているので、良家の子女は正しいセックスを学ぶため、学園で婚約者と三年間セックスを学ぶことになっている。

一年目は座学中心で、本格的に実技を行うのは二年生から。

そして、私は今年二年生になったばかりで、アルヴィンとセックスしたのはまだ数回ほどだ。

入学時に女子生徒は先生から避妊魔法をかけてもらえるので、中出しされても妊娠しない。お陰で妊娠のことを気にせずエッチし放題というわけである。

悪役令嬢の彼女はゲーム内では選り抜いたイケメン取り巻きたちを引き連れ、ヒロインを彼らにレイプさせどん底へ突き落とそうと企む、とんでもない悪女だった。

それをメインヒーローの王子に断罪され、追放されて辺境の地でのたれ死ぬというのが、全ルート中で一番悲惨な末路。

他のルートでも、大抵ヒロインをどうにかして陥れようとしてヒーローに断罪され全てを失う——というのが大抵のお決まりの結末だった。

だから私は出来る限り周りの人たちに優しくし、婚約者のアルヴィンとも良好な関係を保とうと、つかず離れずの距離感を保っていた。

悪役令嬢という設定のせいかな、おっぱいはパンと張り出して大きく、腰がくびれてお尻もキュッと上がったなかなかの美ボディを活かした、

派手な出で立ち。

おまけにマロンブラウンの髪をゴージャスに巻いたいかにもな髪型。つり目で笑っていてもにらみ付けるような視線になってしまったため、必要以上に腰を低くしなくてはならず苦労した。

そのおかげか、見た目は派手だが温厚で人畜無害な伯爵令嬢というポジションを築くことができた。

ヒロインであるアンジェラとも、クラスメイトとしてうまくやれている。

ゲームのシナリオのように、イケメンの取り巻きはいないけれど、中等部の時寮で同室だった下級生のルルがとても私を慕ってくれて、それなりに楽しい学園生活を送っていた。

このまま穏当に卒業して、アルヴィンとの結婚生活に不満はありつ

つも、平和な転生ライフを満喫できると思っていたのに……！

（つか、その女誰なの。二股とか最悪なんだけど！）

ヒロインのアンジェラならともかく、いかにもヤリマンぽいモブ女だなんて！

せめてもつと可愛い子にしないよ！ 明らかに身体目当てじゃん！

苛立ちマックスの私のことなどつゆ知らず、アルヴィンはドヤ顔で私を指差してご高説を垂れ流している。

「僕がどんなに頑張つて種付けプレスしても、君は全然気持ちよくなさそうだし！ クンニや指マンでもまんこが全然濡れないし！ そんな不感症女と結婚してこの先やっていけるとは、とても思えないからね！」

「どの口が言うとするんじゃないボケエこの粗チン野郎が！」

……と叫べたら、どんなにいいだろうか。

そもそも感じられないのはアルヴィンが自分ばかり気持ちよくなろうと挿入したらさっさとピストンしてイッてしまうからだし、指マシだつてガシガシされて気持ちいいわけがない。

私はクリイキ派だつて何度も言つたのに聞いてなかつたのはそつちでしようがつ！

あとおちんぼもちっちゃくて奥まで届かないし。すぐ中折れするし。早漏だし！

包茎じゃないだけマシだけど！！！！

ぐるぐると罵声が頭の中に渦巻いては消えていく。でもすぐに言葉が出てこない。

それにここで言い返してしまつたら、余計に立場が悪くなつてしまふんじゃないか。

私はともかく、一緒にいるルルまで悪く言われるかもしれないし。そう思うと、唇を噛みしめて立ち尽くすことしかできない。

「な……っ！ お姉様に向かつてなんてことを！ 不感症なんかじゃないわっ！ とても奉仕の精神に溢れていて、こんな素敵な身体を持ち主だしっ！ 座学だつてとっても優秀で、私に色々教えてくださっているんだから……！」

私の隣にいたルルが、怒りを露わにふるふると身を震わせて抗議する。

「……ルル、お黙りなさい。下がって」

「でもっ……っ！」

「いいから」

静かに圧を込めて制すると、ルルは不満そうに唇を尖らせつつ一歩下がった。

（ルルの気持ちは嬉しいけれど……彼女が目をつけられてしまったらまずいしね）

強い者にはとことん尻尾を振り、弱い者は徹底的にいたぶる。

それがアルヴィンという男だ。

幼い頃から彼と共に過ごしてきたから、本性はよく知っている。

アルヴィンを怒らせてしまったら……下級生で子爵令嬢という立場の弱いルルが、何をされるか分かったものではない。

（悔しいけれど……ここは耐えるしかないのかも）

「性の不一致で婚約破棄って……前代未聞ですわ……」

「彼女……退学になるんじゃない……」

好奇に満ちたギャラリーのヒソヒソ声が耳に入ってくる。

（うええええええええ……た、退学は困る……！）

もともと婚約者と入学するのが前提なので、パートナー不在となると学園にいる資格がなくなってしまう。

追放破滅エンドよりは、はるかにマシだけれど……

この学校を卒業していることが貴族の子女としての最低条件なので、今後の生活を考えるとそれだけは避けたい。

最悪、実家からも勘当される可能性だってある。

（これ……結構詰んでない……!?）

穏やかに生きようとしただけなのに、どうしてこんなことになってしまったんだろう。

こんなことになるならアルヴィンのモラハラになんか耐えないで、もつと好き勝手にすればよかったのかも。

（……あーあ、しょうもな……）

なんだか何もかもが、どうでもよくなってしまった。

破滅エンドみたいになつたわけではないから、追放されたら追放されたで生きる道はありそうだし。

どこか田舎に引つ込んで、のんびりスローライフを楽しむのもアリなのでは？

男なんてうんざりだから、修道院に入つて神に身を捧げて一生を過ごすつていう道も悪くない。

（うん、腹が決まつてきた。なんとかなるかも！）

「浮気も相当な大罪だと思っけどなあ？ それに、性の不一致ってホントに彼女だけが原因なワケ？」

緊迫した場の空気を弛緩させるような、ノンビリした声の人だかりの向こうから聞こえる。

その瞬間――

ざっ！ とモーゼの海割りみたいに、野次馬が道を開けた。

「リシャル様……！」

女生徒たちの黄色い声があちらこちらから飛んでくる。

モーヴピンクの髪をツンツンに立て、両耳には銀のリング状のピアス。制服のシャツのボタンをはだけたいかにも遊び人風の、異様に顔立ちが整った男子生徒が、こちらへ近付いてくる。

「よう、俺の可愛い子猫ちゃんたち♡今日も元気に発情してる？」

彼があちらこちらに投げキッスを飛ばすと、きやーっ♡と悲鳴じみた声が上がった。

（うわ、初めて間近で見た……！）

リシャル・ド・ゴール。

隣国からはるばる留学している、双子の王太子の一人だ。

恐ろしいくらいの顔整いで、その美貌を活かした（!?）とんでもないヤリチン。

学園の女生徒をほとんど食ってしまったという噂もあるくらいだ。

すごい性豪で一度ハメたら忘れられないくらいのテクニクとおちんぽの持ち主。

ゲーム本編でも、アンジェラがイッてもイッても許してもらえず、一晩中ハメ倒されたものだ。

そして、もう一人は――

「こんな素敵な人を差し置いて、他の女生徒と遊ぶなんて……信じられないな。僕なら絶対、そんなことはしないのに」

「オリヴィエ様……!!」

女生徒たちの熱い視線が、一点に集中する。

そこには、金髪碧眼のいかにも正統派王子というビジュアルの男性が立っていた。

こちらにも、芸術品かと思まごうくらいの気品に溢れた美しい顔立ちだ。

オリヴィエ・ド・ゴール。

リシャルの兄で、成績優秀、品行方正、文武両道、おまけに誰にでも分け隔てなく優しい人格者と、完璧超人の王子様なのである。

彼もまた、学園中の女子生徒の憧れの的。

本編ではリシャルとは真逆にヒロイン一筋で、ひたすらに甘く優しくアンジェラを愛し、純愛イチャラブ路線を貫いてくれた。

（この二人がなんでこんなところに……？）

学園の有名人と名高い彼らが、わざわざ一般学生の痴話喧嘩に顔を突っ込むなんて。

面白がられているのだろうか？

アルヴィンとモブ女生徒も戸惑っているようで、なんとなく腰が引けている。

「アンタが、彼女の元婚約者？」

リシャルがずっとアルヴィンに顔を近づけて、笑顔で圧をかける。

「こそ、そうですが……」

「じゃあこの子、俺がもらってもいい？」

「へっ!？」

思わず変な声が出てしまった。どうしてそうなるの!？」

(……あ、そっか)

学園一のヤリチンと名高いリシャルのことだ。婚約者がいなくなった私を好き勝手に弄ぼうという魂胆なのだろう。それなら分かる。

ゲームの進行上、きつと本命はヒロインのアンジェラだろうし。
(こういうハイエナみたいな男つて、どこにでもいるんだな……)

「い、いや、僕の一存ではなんとも……」

アルヴィンの情けない声と言ったら！

さつきまで私に高圧的に接していた男とは同一人物と思えない。も
つとしゃきつとせんかい！

「まあ確かにそうか。こういうことは本人に聞かないとね。ねえ、君
？」

くるつ、とリシャールがこっちを振り返った。

「はっ、はいっ!？」

「俺と、婚約しよつか」

「は……?」

目が点になった。今のつて、聞き間違いじゃないよね？

「今、婚約とおっしゃいましたか？」

「その通りだけど？」

「ど、どうして私と？ リシャル様なら、もつと相応しい方がいらつしやると思いますか？」

「俺は、アンタがいいんだよ」

リシャルが私の顎をクイと持ち上げ、顔を近づける。

（ひいひい……！ 顔整いのどアップ、心臓に悪い……！）

ゲームをプレイしていた時も、リシャルのプレイボーイぶりには振り回されていたけれど。

実際リアルで目の当たりにすると、雰囲気もうスケベすぎる……

！

見つめられると視線だけで孕みそう♡と噂されていたのは本当だった。

色気たっぷりの眼差しに当てられて子宮はきゅんきゅんしっぱなし。ときめきを通り越して脳の回路が焼き切れそうだ。

「ままま、待ってください！こ、心の準備が……っ」

「ふふ、かわいい。心配しなくてもいいんだよ。全部俺に任せて、子猫ちゃん♡」

「いやっ、そういう問題じゃなくて、その……」

リシャルの顔がどんどん近付いてくる。えっ待つて。これつてもしかして、キスされちゃう!?

「ひええええええええ!!」

ルルが顔を赤らめて絶叫する。あちらこちらから「イヤーっ!」

「嘘でしょっ!?」などと女生徒達の悲鳴が飛び交い、もう阿鼻叫喚だ。

「リ、リシャル様、おやめください！　こんなところで破廉恥な

……っ」

「じゃあ、人がいないとこならいいの？」

「そういう問題じゃなくて、その……!」

「リシャル、彼女は怖がつているじゃないか。そうやってすぐ距離を詰めるのは君の悪い癖だな」

オリヴィエが私とリシャルの間に割って入る。

よかった。彼は良識がある方のようにだ。

「弟が失礼なことをしてしまい、申し訳ない」

「いえ、とんでもないです」

「それで僕からも話があるんだけど、いいかな？」

「はっ、はいっ！ 何でしょうか……？」

しやきつと居住まいを直す。

もしかして、この騒動を起こした張本人としてお叱りを受けてしま
うのか。

いや、正義感の強いオリヴィエのことだ。 私たちを仲裁しに来たの
かも……？

「君に結婚を申し込みたい」

「……!？」

彼の答えは、私の想像していたものとはまったく違っていた。

リシャルドだけならともかく、なんでオリヴィエまで私に結婚を申
し込んでくるの？

隣国では双子の王子は両方王位継承者となり、いずれは二人で王座

につく設定だったはず。

ということは一

(……もしかして、二人とも何らかの事情で契約結婚の必要に迫られている、とか……?)

ゲーム中ではオリヴィエとリシャールはそれぞれ別ルートだったのでそんな設定はなかったが、他に理由が考えられない。

だって、彼らなら、婚約者なんてよりどりみどりだろうし。

というか、私が知ってる『愛プリ』と全然展開が違っていて考えが追いつかない。

なにこれ、バグなの!? それとも私が知らない隠しルートでもあった?

「あ、あの……もしかして、すぐに婚約者が必要な事情がありなん

でしょうか？ お二人ならもつとふさわしいお相手がいらつしやると
思いますが……」

しどろもどろになつて答えると、リシャルは額に手を当てて物憂
げにため息をついてみせた。

「もしかして俺の愛を疑つてるの？ 悲しいなあ……俺は真剣に求婚
しているのに」

「僕だつてそうだよ。僕は君以外考えられない。君のセックスパート
ナーとなり、ゆくゆくは妻に迎えたい」

オリヴィエが私の手を取り、口づける。

キャーッと女子生徒たちが悲鳴じみた声をあげた。

「俺も同じだ。なあ……俺のモノになれよ……アンタを絶対に幸せに
してやる」

今度はリシャルがもう片方の手を取り、口づける。

「ひいいい……！ 私のリシャル様が……！」

ボタンと後方で、誰かが倒れるような音がした。

どうやらショックを受けた女子生徒が、卒倒してしまったらしい。

この世界で男性が女性の手を取りキスをするということは、永遠の愛を誓ったも同然なのだ。

アルヴィンとモブ彼女は完全に空気。

なんなのこれ。ヒロインならともかく、ざまあ要員の悪役令嬢にこんなイベントが発生するなんて。

しかも一人ならともかく二人つて。システムのバグとしか思えない。

「俺に決めちゃいなよ。俺、好きになつたら一途なんだぜ？」

「僕を選んでくれ。君に一生の愛を誓うよ」

ぐいぐいと私に迫るイケメン二人。あまりにも顔が良すぎて圧が強い。

キラキラオーラに当てられて、頭がクラクラしてきた。

「俺にしとけて！　なあ！」

「いや、僕にするべきだ！」

「いや……あの……その……えつと……い、今すぐ決めろというのはさすがに……っ」

「じゃあ、俺が奪ってやる」

リシャルにぐい、と腰を抱き寄せられる。するとオリヴィエが私の手を引いて自分の方へ引き寄せようとする。

彼らが私を奪い合う度に、ショックを受けてバタバタと女生徒達が倒れていく。

「おお、お姉様あ……」

おろおろして半べそのルル。もうどう事態を收拾していいのかわからない。

（どうしよう、誰か助けて……！）

「——お困りのようですね。私から提案があるのですが、聞いていただけますか？」

「……クロフォード先生！」

プラチナブロンドのウエーブヘアを緩く束ねて片眼鏡をかけた男性が、こちらへ歩いてくる。

クロフォード先生はシリーズを通して登場し、ゲーム内のルールなどを教えてくれるチュートリアル担当のサブキャラクター。

セックス研究の第一人者で、セックスに関する授業を一手に引き受

けている。

より良いセックスライフのために、大人のオモチャの研究開発にも取り組んでいるらしい。

講義はとても分かりやすく実用的で、親身になって生徒達の性の相談に乗ってくれる頼れる存在なのだ。

「事情は把握しております。彼女をお二人の婚約者にすることも可能なのですが、どちらかに決めたい、というのであれば——セックスバトルを行うというのはいかがでしようか？」

「セッ……セックスバトル!？」

何やら不穏な言葉が飛び出してきた。

クロフォード先生の提案はこうだった。

これから一ヶ月間、双子の王子が毎日交代で私とセックスをする。

そして心と体の両方で交流し、どちらが私にふさわしいかを決めてもらおうというものだ。

「セックスの相性は一生を左右すると言っても過言ではありません。あなたには慎重に決めていただきたい。そのためには、このセックスバトルを行うのが適切だと考えております」

「……おもしろい提案じゃん？ 俺、悪いけど負ける気はないから」「僕だつて。必ず彼女を真の快樂に目覚めさせ、正しいセックスへ導いてみせる」

リシャールは戦闘意欲ギンギンでやる気満々だし、オリヴィエも静かに闘志を燃やし互いににらみ合う。

ギャラリーも固唾を飲んで、二人の様子を見守っている。

このトラブルの発端となつたはずのアルヴィンですら完全に傍観者

と化している。

どうしてこうなった。

「ふふ。お二人とも、やる気に満ちていますね。さあ、あなたはどうかされますか？」

場の視線が一気に私へ集まる。すごい。こんな強烈なプレッシャー初めて受けた。

（こんなの、イヤって言えない空気じゃないのよ……！）

……でも、考えようによつては悪くない。

ヒロインとして接していた彼らとは少し違うけれども……

こんなにセクシーかつ魅力的な男性二人に迫られるなんてシチュエーション、めったにないわけだし。

今の私は前世の地味なアラサー女じゃない。エッチな身体と美しい

顔立ちを持つ悪役令嬢！

どうせ一度婚約破棄された身だ。もう誰の顔色も窺う必要なんてない。

私は自分の好きなように生きる……！

（……よし、決めた！）

ルルが心配そうに私を見上げる。大丈夫よ、というようにふつと微笑んでみせた。

「——分かりました。そのご提案、お受けいたします」

顔を上げて厳かに答えると、ギャラリーがわつと湧いた。

「フフ。その答えを待っていましたよ。さあ、どんな素晴らしいセックスが見られるか……楽しみです」

クロフォード先生が愉快そうに目を細める。ホントは面白がつてん

じゃないのこの人。

「ありがとう。君が僕を選んでくれるよう……全力を尽くすよ」

「アンタは俺を絶対に選ぶ。そういう運命なんだ」

二人が左右から私の手を取り、もう一度指先に口づける。

やんやと拍手喝采のギャラリィ。満足げに頷くクロフォード先生。

そして、目一杯虚勢を張って悪役令嬢らしく振る舞ってみたものの、

実際は足ガクガクの私。

かくして、セックスバトルの火蓋が切って落とされたのであった

第一章 キラキラ系正統派王子に徹底的にクリ虐めされて初潮吹き
アクメっ♡

——翌日。

「ほら、あの方よ。オリヴィエ様とリシャル様に求婚されたっていうのは……」

「確か婚約破棄されたのよね。そんな方に、どうして……？」

（ああゝゝゝすっごい見られてるゝゝ）

登校中、校舎へと続く道をルルと一緒に歩いていると、すれ違う生徒たちがちらちらこちらを見ながら、ひそひそと噂話をしている。

昨日の件は、すっかり学園中に広まってしまったようだ。

（まあ、あんな大騒ぎになったんだから仕方ないけど……）

「一体どんな素敵な方かと思えば……あんなケバケバしい女、一体どこがいいのかしら？」

「お二人に相応しくないわよね。何か弱みでも握ってるんじゃないの？」

彼らのファンであろう女性たちからは、トゲトゲしい目つきでにらまれるし。

（ああもう、めんどくさい……）

「そつ、そこの先輩方っ！ 聞こえてますよっ！ お姉様を愚弄するのは私が許しませんからっ！」

ルルがガルルル……と小型犬の威嚇よろしく彼女たちに食ってかか

ろうとする。

それをどうどうとなだめながら歩いていると、クラスメートたちがすすすーつと近づいてきた。

「ねえねえ、聞いたわよ！ セックスバトルの件！」

「お二人にいつぺんに求婚されるなんてすごいわね！ もしかして、昔から交流があつたの？」

「いえ……お二人のことは存じ上げてはおりましたけど……ほとんど面識はありませんの」

「ええっ!? じゃあ一目惚れ!? ロマンチック〜！」

「もしかして、婚約破棄されたの時の毅然とした貴女の対応を見て、好意を抱かれたのかも！」

「そ……それはどうでしょう？ とにかく、わたくしにも何がなんだ

か……」

「で、どちらの王子様と婚約なさるの？」

ずい、とクラスメートたちが私へ詰め寄る。

「そ……それはまだ決めておりませんわ。セックスバトルは始まったばかりですし……」

「でも、第一印象で、なんとなく決めていらつしやるんじゃない？」

「そうよそうよ！　ねえっ、正直なところ、どちらの王子様がタイプなの？」

「え、ええと……そのお……」

「やあ、おはよう」

「……！」

クラスメートたちが私の背後に視線を集中させる。

振り返ると、オリヴィエが立っていた。

爽やかな朝の光に照らされる彼は神々しいくらいに美しい。

クラスメートたちはうつとりとオリヴィエに見とれている。

「お、おはようございます」

「昨日はお騒がせして申し訳なかった。けれど、どうしても彼女への愛を抑えきれなかったんだ」

オリヴィエが私の髪を一束とって口付けた。

ヒッ、とクラスメイトが喉を詰まらせてガタガタ震え始めた。

おびえているわけではない。あまりにもオリヴィエの仕草が美しすぎて感極まってしまったようだ。

「クロフォード先生に聞いたんだけど、バトルの間僕たちは特別に授業を免除されるから、好きなだけ交わってもいいそうだよ。君を一日

中たつぷり愛せるなんて夢みたいだな……♡」

すつ、と手を伸ばされ、気がついたら彼の胸に抱かれていた。

「ひいいい……！」

興奮し過ぎたクラスメートがよろめいてしまう。

「さあ、二人で【行為室】へ行こうか。昨日はあまり話せなかったから、君とゆつくり語り合いながら愛を深め合いたいな」

オリヴィエがニツコリと微笑む。天使を見たことはないけれど、きつと本当に存在するのならこんな姿なのだろう。

「では、失礼」

「おおおお、お姉さまあ！ 頑張つて励んでくださいませっ！」

ルルが懸命に叫んで手を振る。

それに答えるようにして、オリヴィエの肩ごしにひらひらと手を振

ったのだった。

【行為室】へ入り、並んでベッドに腰掛ける。

(……ここに來たの、久しぶりかも)

——【行為室】とは、セックスを行うための部屋である。

主にセックスの実技授業のために使用されるのだが、それ以外でも学園の生徒達はセックスしたくなったら、使用許可証を提出すればいつでも好きな時にこの部屋を使いやりたい放題出来る。

「……やつと二人きりになれたね」

オリヴィエが柔らかに微笑み、私をじつと見つめる。

透き通るようなサファイヤ色の瞳は私への愛に満ち満ちていて、もう見つめられるだけで蕩けてしまいそう……！

（……でも……どうしてこんなに好感度マックスなの……？）

興味本位で乱入してきたであろうリシャルと違って、オリヴィエは私を知っている様子だった。

でも、転生してから彼に会ったことはないはずだけど……？

「あの……どうして私にプロポーズを？ 大変失礼ながら、オリヴィエ様とは面識がないと思うのですが……」

「……覚えていないの？ 寂しいな」

オリヴィエが悲しそうな顔になった。

「中等部の時……だったかな。事務室への道がわからず迷っていた僕を、親切に案内してくれたじゃない」

「……！ あ、あの時の……!？」

思いだした。

あれは、中等部の二年生の時のこと。

期の途中で隣国から留学してきたという男の子を、道案内したことがある。

『昨日は初日だったから従者が一緒に登校してくれたんだけど。今日からは一人だから迷っちゃって』

『弟は別のクラスだから、一緒には来られなかったんだよね』

なんて話していた気がする。

道案内だけだから名前すら聞かなかったし、お互い言葉がうまく通じなくてそれどころではなかった。

言葉が分からないなりに、身振り手振りで懸命に説明したのをよく覚えている。

あの頃の彼は小柄で女の子みたいな見た目だったけれど、目の前の

オリヴィエは長身ですらりとした美青年に成長していて、同一人物とはとても思えない。

（数年でこんなに変わるなんて……成長期の男子恐るべしだわ）

「大変失礼いたしました……！　確かに、殿下には一度お会いしたことがございます！」

慌てて深々と頭を下げる。まさかそんな伏線を見落とすなんて……ゲームなら絶対忘れないのに。現実攻略、難しい。

「まだこの国の言葉に慣れていなくて片言だった僕に、一つ一つ言葉の意味を丁寧に教えてくれながら案内してくれたよね。君の優しさが忘れられなくて、あの時から密かに見守っていたんだ」

「……！」

（そんな長い間、私を……!?）

メロい。メロすぎる。こんなことを言われてはオリヴィエによるめいてしまう。

状況は違えど、ゲームでときめいた彼の仕草や台詞まんまなんだもの。

「婚約破棄されてしまった君には申し訳ないけれど……これはチャンスだっと思った。どうか……僕を選んで欲しい。そのためには、なんでもするから……」

「……あ……っ……♡」

両頬を手で包み込まれ、顔を近づけられる。

鼻先が触れ、薄く形のよい唇が私の唇に触れた。

ちゅ……ちゅっ……ちゅぷっ……♡

唇をなぞるように、ちゅ、ちゅっ、とキスを落とされる。

そのまま軽く吸い着かれ、ちゅ、ちゅっ♡とついばむようなキスへ移行する。

「ん……ふう……♡」

「君の唇……柔らかくて、温かくて……とても、可愛いね……♡」
ちゅむっ♡と唇を食まれて、ぞわぁ♡と頭の裏が甘く痺れる。

歯列を割って潜り込む舌は、れろお♡と口蓋を舐め回して。

舌先が喉の入り口を撫でれば、それだけでもう喉イキしてしまいそうに心地良い。

（なにこれ、キスうまつ……!）

アルヴィンはおろか、前世で付き合ってきた数少ない彼氏たちとのキスとも全然違う。

まるで異次元。体の芯からトロトロに蕩かされてしまいそう……!

「ふ……はぁ……んう……♡」

気がつけば、私はオリヴィエにしがみつき、夢中で唇を貪っていた。
「ふふ……ちゅっ、ちゅって子猫みたいに吸い着いてくるね。僕の舌、
美味しい？」

「ふぁ……美味しい……れすう……♡」

「もうトロトロになっちゃって……可愛いな。君が不感症だなんて信じられないよ」

すっ……としなやかな指先が頬を撫で、首筋を伝って乳房へ降りる。
すり……すり……と乳房の輪郭をたどられて、期待で胸がむずむず
してくる。

かりっ♡

「っ……♡お……ッ!?」

制服越しに乳首を引つかかれた途端、ジーンと熱い疼きがおっぱいに走った。

（な……なにこれっ♡乳首、ちよつと触られただけなのに……っ♡）
ちゅ……ちゅむ……♡ちゅぷ……ちゅう……♡

かりっ♡かりかりっ♡すりい♡

口の中を舌で愛撫されながら、乳首の先を引つかかれたり指で乳輪を撫でまわされたり。

ゆるゆると、優しい動きなのに快感が胸に渦巻いて腰が浮き上がってしまふ。

「ふふ、もうお尻が浮いちゃってるね。もしかして……乳首弄られるの、好きなの？」

ぴんっ♡

今度は乳頭を指で弾かれる。

「ひんっ♡」

裏返った声を上げて仰け反ってしまった。

「君、やっぱり不感症なんかじゃないよ。むしろとても感じやすい、えっちなおっぱいの持ち主じゃないか……♡」

「は……ひんっ♡だって♡ちくびっ♡こんな風にされたことなんて♡ない……ですし♡」

「婚約者の彼は、どんな風に触っていたの？」

「胸を……揉んだり、吸ったり……ひととおり座学で教えられたとおりにしていました……なんていうか……適当で……」

「それはいけないね。こんな素敵なおっぱいを粗雑に扱うなんて……紳士の風上にもおけないよ。君もずっと欲求不満だっただろう？ 可

哀想に……」

すりっ……♡すりすりっ♡むにいい♡

「はうんっ♡」

乳首を指で挟んで擦り上げ、上へ引っ張り上げる。

柔らかい乳肉に沈んだ指は自在に動き、おっぱいをむにむにとこね回して。

ぷりゅんっ♡と硬く熟れて逃げる乳頭を捉えて、くりくり♡と愛でるように指腹でさする、

（うそおお♡乳首がっ♡こんなに気持ち良いなんて♡知らなかった♡すごすぎるうう♡）

セックスなんて知りませんって清廉潔白そうな顔をしているくせに。なんていやらしい手つきでおっぱいをこね回すの♡スケベすぎる

っ♡

「はっひ……ん♡は……ああ……♡」

「乳首をすりすり♡ぴんぴん♡しただけなのに、大きなおっぱいをゆっさゆっさ♡揺らして首まで真っ赤に染めて……♡初めての快感に胸を焦がしているんだね♡初々しくてときめいてしまうな……♡」

「ふぁ……♡はひいひい♡もおちくび♡やめてっ♡ん……♡……♡」

答えの代わりにぢゅぅ♡と唇に吸い付いて塞がれる。

こりこりこりこり♡かりかりかりかり♡♡

乳首の根元を摘ままれて、指先で絶え間なく引つかかれる。

かりかりかりかり♡きゅうううううう♡すりすりすりすり♡

乳首をぐにいと引つ張り上げられ、ぽってりと膨らんだ乳頭を折り曲げた指で押し潰してこね回される。

「……………いつ♡ひいいいん…………♡」

おっぱいの中で快感の粒がぱちぱち♡と飛び散って、ふるふる♡と引きつれた下腹部がせわしなく震えた。

「…………イッちやった？」

返事をする余裕もなくコクコクと頷くと、オリヴィエが私の顔を覗き込む。

「もしかして、乳首イキも初めて？」

またもやコクコクと頷くと、オリヴィエは嬉しそうに目を細めた。

「嬉しいな…………♡君の初めてになれるなんて、夢みたいだ」

まだじんじんと疼く乳首をすりと撫でられ、腰が揺れる。

まるで私の気持ちいいところを、全部知っているみたい……♡

「ねえ……クリイキは、したことある？」

「え……つと……その……自分でした時、なら……」

両手をこすり合わせて、もじもじしながら答える。

オナニーをカウントしていいのかどうか迷ったけれど、ここは正直に告白しておいた方がいいだろう。

「ふふ、包み隠さず話してくれてありがとう。やっぱり自分の指が一番イけるよね。君より気持ちよくできるかどうかかわからないけれど、全力を尽くすよ」

すりっ……♡

「あっ……♡」

指先が下腹部へ伸び、探り当てるようにしばしまよう。

クリの場所を探し当てた指先は、ぴとりと肉芽の尖りに指を置いた。

「これが、君のクリ？ 小さくて可愛いね」

「……………」

微笑まれ、いたたまれなさで耳まで真っ赤になる。

だってクリが小さいのは、この世界では恥すべきことだと教えられていたから。

この世界ではつるりと向けたデカクリこそ至高。クリが小さいことをアルヴィンにもねちねちバカにされていたのだ。

「どうして？ むしろ嬉しいよ。君の可愛いクリを立派なずる剥けデカクリに育て上げられるんだからね……………」

「ふえ……………」

「すりい……………」

折り曲げた指で、ショーツ越しに肉芽を撫でられる。

すり……♡すり……♡

ゆつくりと程よい圧をかけて淫核をさすられ、じわあ……♡と血がクリトリスの中心に集まっっていく。

「あ……もう芯が固くなってぷっくり♡膨らんできたね。小さいけれど感じやすく素敵なクリじゃないか……♡こうやってしつかりマッサージすれば、ちゃんと大きく育てるよ」

かりっ♡

充血して膨らんだクリの先端を指で引っかかれ、じいん♡と甘い痺れが肉芽の中心からそけい部へ向けて広がってゆく。

「もう腰ビクしてる。クリカリカリ、気持ち良いんだ？」

かりっ♡かりかりっ♡

（クリカリカリっ♡どんどん激しくなってるっ♡根元からスリスリされて、ぴったりとショーツごしに張り付いてっ♡）

自分でしている時はすぐにショーツを脱いで、もうひたすらにクリの真ん中をこすこすこすっ♡ってして即イキ目指すんだけど。

まるでイクのを許さないみたいにな、甘い刺激しか与えてくれない。

「クリ、可愛く膨らんできたね……♡ぷりっぷりの感触がショーツ越しに伝わってくるよ。まるでよく熟れた果実みたいだね。このまま、摘み取ってしまいたくなるな」

「あ……っ♡」

両脇から指で肉芽を挟まれ、上にぬぢゅ♡ぬぢゅっ♡と擦り立てられる。

（なんでこの人っ♡私が一番好きなクリオナの仕方知ってるのっ♡）

「ふふ、そんなに腰をへこつかせて。ちんぽみたいにクリシコされるの、好きなんだね」

「うあ……♡好き……れすつ……♡こ、これが♡一番、早くイケ、るのでえ……♡」

「そうなんだ、良かった……♡もつとクリを大きく膨らませて、いっぱいクリシコ出来るようになるうね♡」

ぬっぢ♡ぬっぢ♡ぬっぢ♡ぬっぢ♡

ぷっくり♡ショーツから浮き立った肉芽をがっちり挟まれて、ちこちこ♡と小刻みに抜きあげられる。

お腹の底にじんっ♡じんっ♡と熱い疼きが溜まって、ショーツがえっちな汁でびっしょり濡れてきちゃう……♡

もおアルヴェインのクリ弄りなんて話にならない♡あんなの前戯っ

て呼ぶのも恥ずかしいくらいおざなりだったしっ♡オリヴィエのクリシコでっ♡全部上書きされちゃうっ♡

「ふふ、どんどんカタク大きく育ってきた……♡その調子……♡クリを大きく膨らませないとお手入れが出来ないからね……♡」

「お、お手入れて、何を……あああっ♡」

ちゅっ♡♡ちゅっ♡♡ちゅっ♡♡

かり♡♡かりかりかりかりっ♡

大きく膨らんだ肉芽を挟んで扱きながら、片方の手で先端を引つかれる。

「ま……待ってっ♡両方なんてっ……♡いきなりっ♡だめえ♡イツ、イキそっ……♡」

「ダメだよ、まだイったら……♡この程度で達してしまったら、雑魚

クリだってパーティーで笑われてしまうんだよ？ 座学でも、即イキは恥だつて教わっているだろう？」

「そつ……そうなんですけどお……ああああ……♡」

「ほら……我慢、我慢……♡」

ふぢいいい♡

「……♡」

クリの神経が集まったところを的確に押し潰されて、ぴーんと爪先が反り返った。

「もう少し、頑張つて……♡」

ちゅむ……れろれろ……ちゅうう……♡

舌で咥内をかき回されながら、根元から痛いくらいに勃起したクリをすりすり♡される。

イケそうでイケないっ♡つらいっ♡

「お願いっ♡もお……限界……っ♡クリでえ♡イカせてっ……♡」

「ふふ、よく我慢できたね。えらいえらい♡ご褒美にたっ……ぷり君の好きなクリシコしてあげるから、エレガントにイクイク♡しようね♡」

ちこちこちこち♡

しゅりしゅりしゅりしゅり♡

ぽってり膨らんだクリの根元から裏筋を指腹でネットリ擦り上げられながら、もう片方の手で先っぽを押し潰されてこね回される。

「君の好きなところ全部丸ごと愛してあげる。ほら、こうやって敏感になった先っぽに爪を食い込ませて、かりかりかり♡って激しく引つ搔いて、勃起したクリの根元からしこしこしこし♡ってカ

夕いとこ押し潰して♡頭の中、クリイキで一杯にしてあげるから……♡」

（ああああ♡ダメっ♡ダメっ♡意識がゼーんぶクリに集まってっ♡イクことしか考えられないっ♡きもちいい♡クリシコきもちいいよおおお♡）

「はかあ♡とだらしく足が開いて、オリヴィエの指に導かれるように腰をがつくんがつくん震わせる。」

「んいい♡はひつ♡んう♡あつ♡イグッ♡クリシコでイグッ♡もつ♡

……無理っ♡いつ……くうんッ♡」

オリヴィエにしがみつき、思いきりおまんこを差し出すようなポーズで達してしまう。

とろお……♡とほかほかおまんこからえっちなおつゆが染みて、シ

ヨーツのクロツチがべつたりと濡れていく。

「ふふ……初クリアクメも達成しちゃったね……♡君の乳首とクリに、僕の指先の記憶を刻み込んだことを、光栄に思うよ」

全身から力が抜けて、ぐつたりとオリヴィエの腕の中に崩れ落ちる。オリヴィエは優しく私の額に口づけて、耳元でそつと囁いた。

「ねえ。クリ磨きはもう経験している？」

そういえば、ヒロインのアンジェラがクリ磨きでめちやくちやに乱れてイキまくっていたシーンがあつた……ような。

（確か、ブラシとか布でクリをぴかぴかに磨くプレイ……だよな）

見てる分には、めちやくちや気持ちよさそうでドキドキしたけれど、アルヴィンは私のクリ育成になんて無関心だったからすっかり他人事だった。

「まだ、です……」

そう答えると、彼の顔がわずかに曇った。

「君の婚約者は、一体何をしていたの……？ 全く義務を果たしてないじゃないか。愛する人のクリを美しく磨くのは、男としての務めなのに」

「あはは……私に手をかけるほどの魅力がなかったんじゃないですか？ ほら、浮気されるような女だし」

自虐気味に言うのと、そつと口元に指を押し当てられる。

「自分をそんな風に貶めてはいけないよ。君はとても素敵な人だ。それに……そんなことを言うと、君に求婚した僕まで貶めることになってしまうよ？」

「……！ も、申し訳ございません！ 殿下を辱める意図はなかった

のですが……！」

「君は何にも悪くない。彼が君の価値を理解していなかっただけのことでよ。だから……これから僕が君をより美しく変身させてあげる」

ショーツに指をかけられ、なめらかな仕草で引きおろされる。

「あつ……ちよつと待つ……あああゝつ！」

皮を被ったままのクリが、オリヴィエの眼前に晒された。

「……君……まだ皮かむりだったの……？」

オリヴィエがベッドから降りて私の股間に顔を近づけて、呟く。

「……ごめんなさい……」

耐えきれなくなつて顔を覆う。

アルヴィンは本当にクリに興味がなさすぎて、皮すら剥いて貰えなかったのだ。

それどころか「クリくらい自分で剥けよ。人に頼るな」などと鼻で笑われていたのだ。

ふつくらしてつやつや磨かれた他のクラスメイトのデカクリが、どれだけ羨ましかったか！

「短小クリな上に皮被りだなんて……みつともないですよ……」

「……素敵じゃないか……♡」

頬をバラ色に染め、オリヴィエが吐息を漏らす。

熱い吐息がクリトリスにかかって、ふるりと震えた。

「だって君のクリはまだ誰の手にもかかっていない、いわば処女クリってことだろう？ 君の初めての皮むきを僕が担えるなんて、こんなに嬉しいことはないよ」

「オリヴィエ……様……！」

思わず涙が溢れそうになった。なんて慈愛に満ちた優しいお方なんだろうか。

「ありがとうございます。そんな風に言っただけなんて……うう……」

「泣かないで。これから僕が君を目一杯幸せにしてあげる。約束するよ」

「はい……！」

「さあ、もう泣くのは止めて？　せつかくの可愛い顔が台無しだよ」
指で目元をそつと拭われ、口づけられる。

ああ、まるでおとぎ話の王子様みたいだ。

この人なら、私の全てをまるごと受け入れてくれるに違いない。

（オリヴィエって本当に包容力があって、大人で……素敵な人……）

♡

「さあ……せつかく育てたデカクリが萎まないうちに、しつかりクリ磨きをしておかないとね」

ふわり、と彼の手の中に歯ブラシのようなものが浮かび上がった。

「ぴっかぴかに仕上げてあげるから、どこに出しても恥ずかしくないズル剥けデカクリになろうね……♡」

ぬりゅう……♡

淫唇から染み出る愛液をブラシに擦りつけ、ぴとり♡とクリ横に押し当てる。

ちこちこちこちこ♡

「~~~~~……ッ!? ツ♡えっ♡あああああ~~~~~……ッ♡♡♡♡

♡」

直接クリトリスに電流を流されたような衝撃が走り、腰がガクッと浮き上がる。

（にやにぐれええええ!? クリのっ♡神経がっ♡ごしごしってっ♡ブラシに磨かれてるううう♡）

「フフ、こうすると包皮も綺麗に剥けて、つやつやのクリトリスに仕上げられるんだ。ほら、もう真っ赤に熟れて、テカテカになってきたね……♡」

「ひひひひひひ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

「しつかり横や根元も磨いておこうね……♡ここは汚れが溜まりやすいから」

ちゅこちゅこ♡ちゅこちゅこ♡

毛先が小刻みに動いて押し上げられた包皮へ潜り込み、ぽってり腫

れた肉芽の溝をほじるように磨き立てる。

細いブラシが肉芽に食い込んでっ♡びりびりいい♡って芯から痺れてっ♡

子宮までっ♡振動が響くみたいでっ♡やばいつ♡んぎもぢいつ♡

「あゝゝ………ッ♡っえゝ♡うあゝゝ………ッ♡」

「フフ、そんなにとろつとろのおまんこを僕に差し出して……♡こっちも触って欲しいの？」

「うえっ♡あっ♡んっ♡んうう♡」

コクコク、と力一杯頷く。時折ブラシがおまんこの入り口に触れる度に、切なくって仕方ないのだ。

「今日はクリだけにしようと思ったのに……そんなすがるような目で見られたら、愛さないわけにはいかないな……♡」

「わ……すごい……♡Gスポットがぼつてり膨らんで、おまんこきゅーきゅー締まってくる。クリもおまんこもパンツパンに膨らませて、アクメの準備万端って感じだね……♡とつても素敵だよ……♡」

お腹の奥♡きゅんきゅんして♡ウズウズが止まらなくて♡頭の中もおまんこぐずぐずにとけて♡ぐっちゃぐちゃになりゅうう♡

「……♡あ……♡……♡いぐっ♡いぐいぐいぐうううう♡」

びくびくびくうううううう♡

カエルみたいに足をばか♡とだらしく開いて、腰を突き出してがつくんがつくん揺れる。

ぶぢい♡とおまんこから小さく愛液がしぶいて、内股をべつたりと

濡らした。

「わ……♡クリ磨きで女の子射精しちゃったの？ 初めてとは思えない、完璧なアクメだ……♡」

「はへ……♡は……ああ……♡」

頭真つ白で何にも考えられない。クリがこんなに気持ち良かったなんて……♡

「もつとゆつくりお互いを知ってからって思っていたのに……君があまりにもいやらしすぎて、自分を抑え切れそうにないよ……」

オリヴィエがズボンのベルトを外し、ジッパをゆつくりと引き降ろしてズボンと下着を脱ぐ。

ばるんっ♡とバッキバキに勃起したおちんぽが、私の鼻先へ突きつけられた。

「ひ……っ♡」

（おおおお、おつきい……っ♡なにこれっ♡こんなデカチン初めてみた……っ♡）

繊細そうな美青年という風貌に相応しくない、凶悪なまでに長くすらりとした——でもしっかり張り詰めた肉幹。

パンパンに膨らんでせり出した肉傘。

パスでもついてんの？　というくらいにエグい高低差を誇るカリ首。

むわああ……♡と漂う雄臭を嗅がされて、もう子宮がきゅんきゅんときめいてるっ♡

「ね……君のおまんこに……僕のちんぽをハメたいんだ……♡許してくれるかな？」

「ももっ、もちろん……ですっ♡」

迷うことなく、そう答える。

むしろここでやめられた方が、生殺し状態で困ってしまうし。

「ありがとう……♡じゃあ……挿れるよ……♡」

さす……♡さす……♡とオリヴィエが愛しげに太ももを撫でながら私の上へ覆い被さり、ぬぢゅ♡ぬぢゅ♡と蜜口に亀頭を馴染ませる。

ぬ……りゅう……♡

「あ……ッ♡」

おまんこにゆっ……くりと、おちんぽが沈み込む。

みぢみぢみぢい……♡とナカが割開かれて、あつつあつのバキバキちんぽが入ってくるう……♡

「っ……はあ……っ♡あ……うううんッ♡」

「はあ……っ♡全部……入っちゃったね……♡ああ……♡ナカがヒクヒクして……♡僕のちんぽに馴染もうと頑張っているのが分かるよ

……♡」

オリヴィエがおちんぽでまるく膨らんだお腹に手を当てて、さすさす♡と優しくさする。

「あ……っ♡オ、オリヴィエ様あ……♡い、まっ♡そこっ♡撫でられるとっ……♡」

「敏感になっているところ……だよ。だからこそ、外からもしつかりポルチオをマッサージして、君のおまんこに僕のちんぽの形を覚えて欲しいんだ」

さす……♡さす……♡

指で下腹部を緩やかに撫でさする。

お腹がぼうつと熱くなって、なんだかおまんこがうずうずしてくる。
とん……っ♡とんとん♡

「お……ッ♡」

ひくんっ♡と腰が跳ねた。

指で軽くお腹を叩かれただけなのにつ♡なんでこんなにつ♡子宮が♡じんじんしちゃうのおっ♡

「ふふ……♡ピストンされてるみたいに感じるよね？ おまんこがぐねぐね♡うねって、チン媚びダンスを踊っているみたいだよ……♡」

とんっ♡とんとんとん♡とんっ♡とんっ♡

「はっへ♡あっ♡いいっ♡とんとんしゅきっ♡ひっ♡うう♡あっ♡あっ♡あっ♡」

お腹の内側が熱いっ♡おまんこがじゅわあゝ♡って開いてっ♡おち

んぼずぼずぼしてっ♡ひくひくしてるっ♡

「子宮口がちゅっ、ちゅっ♡ってちんぽの先っぽにキスしてくれてる……♡嬉しいな、もう僕を受け入れてくれたんだね……♡その求愛に応えなくっちゃ……ね♡」

ぬろり……♡と入り口付近まで肉棒が引き抜かれ、ずりゅ♡ずりゅ♡と襞のひとつひとつを愛撫するように浅く抜き差しされる。

甘い心地よさに浸っていると、腰をぐう♡と掴んで引き寄せられて

ずろろおおお……♡ごちゅっ♡

「……♡♡♡♡あ……♡♡♡♡」

一気に奥まで貫かれて、ばちばちっ♡と目の奥で火花が飛び散る。

（ふか……ああ♡♡おまんこの一番奥までえ♡おちんぽが届いてる

……っ♡)

私知ってるセックスと全然違うッ♡

お腹ぱんっぽんで苦しくて、息ができないのに。

五感のすべてが、子宮に集中して……っ♡『気持ち良い』で全身が満たされてるっ♡

「とろっころのポルチオ……♡とっても柔らかくって、愛らしいね

……♡こんなに君と深くわかり合える日が来るなんて、夢みたいだよ
……♡もっと……君を知りたい……♡君の感じるところ、全て僕で満たしてあげたい……♡」

とん……♡とん……♡とっちゅ♡ごっちゅ♡ごっちゅ♡ごっちゅ♡
ぐりっ……♡ぐりぐり……♡こちゅ♡こちゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡
ゆずちゅずちゅ♡

短いストロークで子宮を容赦なくひっぱたかれる。

おへその下がずーっときゅんきゅんしてて、じんじん甘い痺れが止まらないっ♡

「っ……はぁぁ……♡おまんこの奥、すっかり僕のちんぽに懐いちやって……♡そんなにきゅうきゅう締め付けられたら、僕……っ♡もう耐えられないよ……♡」

ばっちゅ♡ばっちゅ♡ばっちゅ♡ばっちゅ♡

激しくピストンされ、おまんこの奥をごっちゅ♡ごっちゅと穿たれる。

子宮が押し上げられてっ♡形が変わっちゃいそうっ♡

「っあっ♡ひんっ♡ひんっ♡ひんっ♡きもちいい♡オリヴィエ様のおちんぽっ♡きもちいいっ♡」

「良かった……♡ねえ、僕たち相性ぴったりみたいだね……♡このまま……マーキングしちゃつても、いいかな……？」

ちゅ、ちゅ♡と唇を甘く吸われながら、囁きを落とされる。

耳をくすぐる声すらも愛撫のように心地良くて、うつとりとうなずく。

「はひっ♡あつ、んお♡お、おお♡」

ずしんっ♡と体重を掛けられて、重たいピストンが繰り出されるっ♡

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅ♡ぐりいいいいいッ♡

「あゝ………ッ♡だめっ♡だめっ♡これだめえええ♡いくっ♡いぎましゅっ♡あっ♡………ッあゝ………ッ♡♡♡♡♡」

どぶどぶうううううう♡びゆるううう——♡♡びゆくびゆくううう
ううう——♡♡♡

わななく肉杭から、沸騰しそうなくらいに熱い白濁が子宮に注ぎ込まれた。

「……………は……………あ……………あ……………♡すご……………い……………♡君のおまんこ
がごくごく僕のちんぽミルクを飲んでるのを……………感じるよ……………♡」

うつとりと私を抱きしめ、熱に浮かされたようにオリヴィエが呟く。
ぎゅう、と彼の首にしがみつき、しばし二人繋がったまま絶頂の余韻に浸ったのだった。

「そろそろ、下校時刻だね。こんな時間まで拘束しちゃって、ごめんね」

「い、いえっ……！　とんでもありません……！　私こそ、お忙しい
オリヴィエ様を引き止めてしまつて……」

初めてのセックスの後、あまりにも彼の胸に抱かれているのが心地
良くて。

うとうととまどろんでいるうちに、下校時刻のチャイムが鳴つてし
まつたのだ。

「また……次に君と交われるのが楽しみだよ。それと……これを、君
にプレゼントするね」

きゅぽんっ♡

「おうっ♡」

萎れかけたクリを指で挟まれ、キャップを嵌められる。

ちゅうう♡とキャップに先端を吸い着かれたクリはみるみる充血し

て膨らみはじめる。

「は……へっ……♡あ、あの、こ、これっ……♡わ、私、ずっと、この状態なんですか？」

「そうだよ。君の小さくて可愛いクリを、立派なデカクリに育てるって約束したじゃない。

そのためには、毎日しつかりクリを刺激することが大切だからね」
天使みたいな笑顔で、とんでもなくえげつないことを言われている気がする……！

でも……拒絶なんてできない。だって……次はどんな風にクリをいじめさせられるんだろうって、もう期待しちゃってるから……♡

「次に会う時はもつと……たっぷり愛してあげる。ゆっくり、君と愛を育んでいきたいな」

オリヴィエが私の手を取り口づける。

きゅん……♡

ときめいた瞬間、ぴん♡とクリトリスが勃起あがってしまったのだった。

第二章 ヤリチン王子にオラオラ系ポルチオ責めとアナル弄りで悶
絶昇天っ♡

「——それではおやすみなさい、お姉様。また明日」

「ええ、おやすみ」

ルルがひらひらと手を振り部屋を出ていく。

お互いに中等部の頃は同室だったけれど、今は高等部へ進学したのでそれぞれ個室に分かれて過ごしている。

けれど、ルルは私と少しでも一緒にいたいと、寝る前にいつも遊びに来てくれるのだ。

（妹がいたら、こんな感じなのかな……）

なんて、前世に思いを馳せる。

私は一人っ子だった。転生した先でも一人娘として生まれたので兄弟姉妹と過ごした経験はない。

それを寂しいと思ったことなんてなかったけれど。

ルルの無邪気さに何度救われたことか。

（あの子も来年は二年生だから、婚約者と共にセックスに励むのよね。なんだか想像出来ないわ……いつまでも子供だと思っていたけれど、もう一人前の大人なのよね）

なんて考えながらそろそろ寝ようと支度をしていると、コンコンと窓を誰かが叩くような音が聞こえてきた。

「……っ!？」

泥棒かと身構えていると、窓の下の方にチラリとモーヴピンクの髪

の毛が映った。

(も、もしかして……)

おそろおそろ窓へ近づいて開けると、いきなり黒い塊がドサツと中に飛び込んできた。

「ひっ……！」

「はあゝさすがに二階をよじ登るのは、結構きつかったぜ……！」
リシャルが床にへたり込んであはあと肩で息をしている。

「なっ……何やってるんですかりシャル様……」

「子猫ちゃんに会いたくないなっと思って思ったら、いても立つてもいられなくなっちゃって」

「こっ……子猫ちゃん……？」

「そゝ♡俺、好きな子はみーんなそう呼んでるから♡」

なんてバチン♡とウインクしてみせるリシャル。

ずるい。これだけでもう、全部許してしまいそうだ。

「で……ですが、女子寮は男子禁制ですよ……！ 寮監の先生に見つかったら、どんな処分を受けるか……」

「大丈夫♡俺、こういうの慣れてるから♡」

「……つまり、他の女生徒にも同じことをしているというわけですね」

「ご名答くく♡でも今はアンタ一筋だから♡」

なんて、ニヤリと笑って私の手を握るリシャル。

ああもうホント……女のキュンとするツボを知り尽くしてる感じ。

（だっ……騙されないんだから……！）

オリヴィエの一途な愛にほだされてときめいている最中なので、余

計に警戒してしまう。

だってリシャルは何を考えているのか、よく分からないし。

私に婚約を申し込んだのも、面白がつてるとしか思えなかったから。「か、からかうのはやめてください。婚約なんて……冗談なんですよ？」

そう言くと、リシャルの顔が曇った。

「……そんな風に思われてたのか。俺、本気なのに哀しいなあ……」

（えっ、思ってたのと違う反応……！）

てつきり軽く流されるところだと思っていたのに。

リシャルはしゅん、と肩を落としてしゃがみこみ、今にも泣きそうな顔になっている。

「俺……アンタに一目惚れだったんだぜ……？ 婚約者に浮気されて

婚約破棄なんて、フツーのご令嬢なら泣き崩れて前後不覚になるところなのに。アンタは毅然としてあの男に立ち向かった。そういうところ……カッコイイなって思っ、求婚したのに……」

「疑ってしまつて申し訳ございません！ あの時、わたくし殿下のことを勘違いしておりました！」

「……ホントに？ 信じてくれる？」

ちら、とりシャルが上目遣いで見上げる。

うわあ、あざとい。こんな顔されたらうなずくしかないじゃない。

「はい、信じます」

「良かった♡ありがとう♡」

立ち上がったリシャールが、がばつと私に抱きついて頬に口づける。ああもう、ヤリチンだつて分かつててもほだされそう。

「は、信じてくれて良かった。なーんかほつとした」

リシャルは私のベッドへ勝手に座り、ごろんと寝転がった。

まるで勝手知ったる自分の部屋だ。でも不思議と腹が立たない。なんだか、大きな猫が遊びに来たみたいで。

「あの……お茶でも淹れましょうか？」

「いや、いい。それよりココ座って？ お話しよーぜ。俺、アンタのこともっと知りたい」

リシャルがぽんぽん、とベッドを叩く。

「し、失礼します……」

おずおずと座るとリシャルがじつと私を見つめた。

「兄貴とは、もうやったの？」

（うわ、いきなりぶっこんでくるなあ……）

ストレートすぎて感心する。さすが学園一のやりチン。

「ええ……まあ……」

「どうだった？」

「……………とても、優しく手ほどきしていただきました」

「ふうん。そりや良かったな。やつぱりアンタも、兄貴にメロメロ
って感じ？」

リシャルは唇を尖らせて拗ねたような顔をしている。

（もしかして……オリヴィエに嫉妬してる……？）

「そ、それはまだ……確かに素敵な方ですけど……」

「だよなく皆そう言う。兄貴の方が人格も成績も魔術の腕も上。俺たちは二人で王位を継ぐ予定だけど……兄貴一人でも十分とかみんな言うてる。俺は要らない子ってヤツなんだな」

(あ……これは……)

もしかしてリシャルは、思っているよりオリヴィエに劣等感を抱いていて、自分に自信がないのかもしれない。

本編ではこんな感情を吐露することはない、仲が良い兄弟だったのに。

「……つて、アンタにこんな話してもしょーがないよな。悪い」

「いえ……要らない子なんて……そんなことないです。少なくとも私は、婚約破棄を言い渡された時、リシャル様に救われたんですから」

それは心からの言葉だった。

めいっばい虚勢を張っていたけれど、心はズタズタに傷ついていた。あのままりシャルが現れなかったら、私は虚しい気持ちを抱えて

学園を去っていたかもしれない。

「……ホントに？ 俺、アンタを救えてた？」

「はい。リシャル様はまさしく私の王子様ですよ」

「……うれし……！」

またもやりシャルが私にぎゅうつと抱きつく。

さっきの挨拶代わりのハグとは違う、力のこもった熱い抱擁。

「俺……やっぱアンタのこと好きだわ」

「え……あ……そ、それは……どうも……」

やけに潤んだ目で見つめられて、たじろいでしまう。

さっきまでの軽いノリとは全然違って、やけに甘ったるい湿度を含んだ眼差し。

（リシャル……もしかして本当に私のことを……？）

「俺の愛を証明するために、アンタをめっちゃくちや気持ち良くさせてやるから……♡」

「あ……っ♡」

ちゅ……♡ちゅっ……♡

頬から唇へ吸いつかれ、軽くタップするように口づけられる。

舌を差し入れられるかと思いきや、唇をれろり、と舌で舐め上げたあと、再び頬から耳へと上がり――

「……!？」

耳の輪郭をぞろりと舐められて、首筋がぞわり、と震える。

「ひ……♡待って、なんで、耳……っ♡」

「耳も立派な性感帯なんだけど？　もしかしてしたことない？」

「ありま……せんっ……♡そんなの……っ♡」

「そーなんだ♡じゃあ、挑戦してみよっか♡」

れろ……♡れろろ……ちゅぶ……♡ちゅぶ……♡

尖らせた舌尖で裏側を舐め回され、溝をかき回されてぴちやぴちやと耳孔に水音が響く。

「ひ……いつ♡あ……っ♡や……あああ……♡」

「っは♡もう背中びくびく波打ってるじゃん♡耳まんこそんなにきもちいーんだ？」

「わ……かな……はひ……んっ♡あああ♡」

ちゅば……ちゅうううううう♡ちゅば♡ちゅば♡ちゅば♡ちゅ
ゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡

たっぷり♡まぶした唾液を耳溝でかき回されて、びくんっ♡びくん
っ♡と勝手に身体が跳ねちゃうっ♡

「ひいひいひい♡いやああああ♡みつ、みみひいひい♡ほんとにつ♡
ダメえええ♡」

「お♡いい反応♡もしかして耳舐め、はじめて？」

「初めて……ですっ♡だからっ♡こんなのっ♡いきなりっ♡むりひい♡」

「耳まんこ処女奪っちゃったんだ♡嬉し♡俺が初めての人だね♡」

じゅぱっ♡じゅぱっ♡じゅぱっ♡じゅぱっ♡

ぐちゅぐちゅ水音を鼓膜に直接流し込まれてっ♡頭の中っ♡直接舐められてるみたいっ♡

「……んひいひいひい♡ひぐうう♡うつ……ぐ……ッ♡う
う…………ッ♡♡♡♡♡」

身を振って暴れる私をギュッと抱きしめて、リシャールが囁きを落とす。

「ん……♡大丈夫、怖くないから♡俺にしっかりつかまって」

「やあああ……もうやだああああ……♡怖い……怖いよおおお……♡」

「は♡初心な反応かーわい♡もーつとしたくなっちゃうな♡」

ぞりいいい……♡ぐぢゅぐぢゅ♡ぢゅぱ♡ぢゅぱ♡ぢゅぱああああ♡♡

まるでおまんこを舐めるみたい♡♡耳を舌が這い回って♡♡

耳タブちゅーちゅー吸われて♡♡揉みくちやにされて♡♡それだけなの♡♡♡

背筋がぞわぞわぞわああ♡♡♡♡♡腰の辺りが甘く痺

れちゃうっ♡

「はっ♡んああ♡やああ♡くるうううう♡何かきちゃうううう♡だめえええ♡もお許してええええ♡♡」

びくびくびくうううう♡

前屈みになってお尻を突き出し、リシャルのシャツをぎゅううううと握りしめる。

「上手に耳でイクイク出来たね♡えらいえらい♡」

リシャルが私の背中を優しくとんとんと叩いてくれる。

「ひ……いん♡はっ……はっ……はああ……♡」

身体の内側が熱くて、どっ、どっ、と鼓動が早くなる。

ただ耳を舐められただけなのに、こんなになっちゃうなんて……♡

「子猫ちゃん、全然不感症なんかじゃないじゃん。むしろ、感じすぎ

てヤバいくらいじゃない？」

「そ……そうなん……でしようか……？　自分では、よく分からなくて……」

アルヴィンとのセックスが全然気持ちよくなかったというのはあるけれど。

前世でつき合ってきた人たちも、大差なかったし。

もしかしたら自分が感じにくいのかもと思ってたんだけど。

「そりゃ元婚約者様が悪いな。レディを気持ちよくさせるのは、男の務めだぜ？」

「ふあ……っ……♡」

抵抗する間もなくするり、と寝間着をたくしあげられる。

むにい……♡

胸を鷲づかみにされて、きゅう♡と乳首を引っ張られた。

痛いような、でも少し気持ち良いような……不思議な感覚に囚われる。

「ひ……うんっ……♡」

リシャールの腕の中で体を揺らすと、ふっと耳に息を吹きかけられた。

「はうんっ……♡」

「やつぱりな。コレで感じるなんてアンタ、Mっ気強いよな。耳めちゃくちゃに犯されてヨガリまくってたし」

「わっ……私が……マゾ……？　でも私……痛いのが好きだなんて思っ
てないんですけど……」

「痛めつけるのだけがSMじゃないぜ？　どっちかっていうと、辱め

られるのが好き、って感じかな？」

むぎゅ♡むぎゅ♡

おっぱいを左右からぎゅううと寄せられて、乳搾りするみたいに乳房を扱きあげられる。

「子猫ちゃんのデカ乳、牛みてえ♡ほーら、ミルク絞ってやるからな♡」

ぎゅうう♡むにつ♡むにつ♡くりっ♡くりくりっ♡
根元からおっぱいを搾られて、乳首をぎゅうううと引っ張って伸ばされる。

なんだか本当に、牛になっちゃったみたいっ……♡

「あ……ん……♡はふ……あ……はああ……♡」

「ほーら、もうメスの顔になってきた♡になって、乳牛になって、ぎ

ゅーぎゅーおっぱいからミルク搾り取られてるところ想像して興奮してんだろ？」

「そんな……は……ああんっ……♡」

「もう胸まで真っ赤じゃん♡かーわい♡」

はむっ♡と耳タブを噛まれて、ぞわっ♡と寒氣じみた喜悅が肩まで走る。

（牛扱いされてっ♡感じてるなんて……♡私まるで変態じゃない……♡）

「ほくら♡おっぱいふるふる♡えっちな乳牛だな♡♡」

乳頭を引っ張り上げられて、ふるふる♡と揺らされる。

たったそれだけなのに、すっごく恥ずかしくて……♡おまんこが、じゅんとしちゃう……っ♡

「つは……♡スゲーやらしー顔になってきた。まんこも、もうぐちよぬれなんじゃね？」

「そ、そんなことお……言わないでくださいっ……♡」

「言われたいくせに♡どれどれ、確かめてやるよ♡」

リシャルの手がショーツにかかり、するりと脱がされる。

するっ……♡

露わになった股間を見た途端、リシャルの眉間に皺が寄った。

「……このクリキャップ……どう考えても兄貴の、だな」

「は、はい……クリを育てたいから、ずっとこれをつけているように、と……」

そう答えると、リシャルが呆れたようにため息をついた。

「相変わらずデカクリフェチなんだな、アイツ。てか、もうズル剥け

じゃん。兄貴に剥かれたな？」

ぴんっ♡

剥き出しの肉芽を弾かれて「お、うっ♡」と野太い声が出てしまう。

「まーいいや。クリはアイツにくれてやる。その代わり……」

にゆるん♡

「あ……っ♡」

「今日はまんこをたっ……ふり可愛がつてやるから♡」

「え……ふあああ……っ♡」

ぬりゅ……ぬるう……♡

割れ目を往復し、クリの根元まですりい♡と蜜をなすりつける。

「え……っ♡ちよつと待って……ください……♡いきなり、そんな……」

♡
「

「んなこと言って、もうまんこぐっちよぐちよじゃん♡全然触ってないのにこんなに濡れる子、なかなかいいよ？」

「だ、だってっ♡耳とおっぱい、あんなにイジめられたら……っ♡」

「ほーら♡やっぱり虐められるのが好きなんじゃん？ いいぜ、今日はたっぷり子猫ちゃんをいじめ抜いてやるから……っ♡」

ぐにゅうう……♡

「ふああああ……んっ♡」

入り口を往復している指先が、ぬぷりっ♡とナカへ潜り込んだ。

そのまま手のひらを上へ向けて、奥まですぶずぶ♡と挿れられる。

「お……♡メチャキツ……♡つか、まん肉もうぽってり♡充血してんじゃん。準備万端って感じ？」

「そ、そんなこと……ああ……あ……っ♡」

お腹の裏のざらついたところを撫でられて、ぐう♡と腰が持ち上がる。

「Gスポもぶつくり盛り上がってっし♡まんこきゅーきゅー締めすぎて指追い出されそうなんだけど？」

ぬっちゅ♡ぬっちゅ♡ぬっちゅ♡ぐぼっ♡ぐぼっ♡ぐぼっ♡ぐぼっ♡

柔らかく蕩けた膣襞をかき回され、ぐぼ♡ぐぼ♡と卑猥な水音が響く。

「うつわゝまんこすげーやらしー音してるゝ♡おまんこ差し出して腰へこかわいーねゝ♡」

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡やあっ♡んっ♡ふうううゝんッ♡」

膣襞の抵抗を押しとどめるように指がくっ♡と折り曲げられて、クリ裏をぐりぐり♡と指腹で押し上げる。

きゅううううんっ♡と尿意に似た感覚がこみ上げて、きゅううううっ♡と膣奥とお尻の奥が同時に締まった。

「うお……すげ……♡指千切れそ……♡何？ Gスポでイキたいの？」

「ち、ちが……やつ♡あっ♡あああああ♡だっ♡だっ♡だめっ♡それだめっ♡なんか来るっ♡へんなの来る、からああ……ッ♡」

「だからイイんでしょ？ ほらっ♡イケっ♡ぴゅーぴゅー潮吹いて女の子射精しろっ♡」

ぴとっ♡

手の平がくっつくくらい指腹を膣襞にぐう♡と押しつけられて、襞をぞりぞりぞりい♡と擦られてっ♡

きゅんきゅん切ないのっ♡くるっ♡♡♡

「つお……っ♡………ッ♡お　　♡………ッ♡」

ぷしゅうううううう♡♡

おまんこから透明な液体がぶちやつ♡と勢い良くしぶく。

「……あ……♡はあ♡はあ……っ♡はあああ……っ♡」

「あーあ♡女の子射精しちゃったなく♡いっぱい潮吹けてえらいえらい♡」

はふはふと浅い呼吸を繰り返す私を抱き寄せ、リシャルがよしよし♡と頭を撫でてくれる。

「ん〜でも……この感じだと兄貴にもうイキ方教え込まれてるよなあ

……兄貴が絶対触らないとこつて言う……ココか？」

お尻の穴をなぞられて、ぞわあ……♡と鳥肌が立つ。

「え……あのっ、そ、そっちは……、ちが……っ……♡」

「お、初々しい反応♡もしかしてお尻は誰にも触られたことないって感じ？」

「ない……ですっ♡だってっ、お、お尻はっ♡セックスするところじゃないしっ……♡」

「アナルも性感帯の一つだって、授業で習ったろ？ まあ、貴族様のお上品セックスとは違うけど……せっかくだから、ぜーんぶ開発しときたいじゃん？」

なんて言いながら、リシャールはもう私のアナルに指を這わせている。

「え……ちよつと……っ♡待ってくださ……やっ……♡」

すり……♡すり……♡

菊座の周りを指で柔らかく撫でられ、ひくんっ♡と大きくお尻がわ

なく。

まるでシワのひとつひとつを愛でるように指がお尻の孔に向かって上下し、くるくる♡と孔の周りをなぞられる。

「ひ……んっ♡あ……うあ……？　は……ああ……♡」

「な？　コッチも気持ちイイだろ？」

「わ……かない……ですっ♡は……ああああ……♡」

じわあ……♡とアナルに熱が集まって、解けていく感じがする。

（何これえ……♡こんなの知らないっ♡私、どうなっちゃうの……っ♡）

ぬちゃあ……♡ぬりゅ♡ぬりゅ♡

イキたてはやはやのおまんこに指を這わされ、たっぷり♡蜜を掬ってお尻の穴へ塗り込まれる。

「ひ……んっ♡あ……あ……っ♡」

「ホントはローション使うんだけど、こっただけ濡れてればマン汁でもイケそうだな♡」

「え……♡あ、あの……ほ、ほんとに、指、挿れ……っ♡」

「そーだよ、挿れちやうぞっ♡せー……のっ♡」

ぬぶううううううう♡

「………ッ!? え……あ……あ………ッ!?」

指先が僅かに肛孔へ沈み込む。

異物感がこみ上げてきて、お尻がむずむずするっ♡

「あ……やあああ……♡抜いてっ♡抜いてください……♡」

「大丈夫、すぐ馴染むから♡ほら……ゆっ……くり抜き差ししたら

……♡褌が柔らかくなってきた……♡」

「……い……ひい♡あっ♡んっ♡ふああああ♡」

ぬず……♡ぬぼ♡ぬぼ♡ぬぼ♡

お尻の中をまさぐられ、ぬずう♡と奥まで指を沈められる。

ひくっ♡ひくっ♡とナカが疼いてっ♡撫でられるとお腹の奥がきゅんってしちゃうっ♡

「ん……ふう♡は……あ……あ……ッ♡」

身体から力が抜けてっ♡ぐんにやりしてくる♡

「っは♡もうケツまんこで指ぎゅーぎゅー締め付けてる♡アナルの才能ありすぎ♡」

「そんな……こと……言わないで……あっ♡」

「まんこ寂しいだろ？ 一緒にイカせてやるよ♡」

ずぶう……♡

かなか悪くないんだぜ？」

とんっ♡とんっ♡

指が優しく、子宮口の入り口を撫で回す。

触れるか触れないかの柔らかいタッチなのに、じわあ……♡と身体の内側に深い快感が滲んで。

ずぶずぶと奥底に沈んでいくみたいっ……♡

「………♡♡♡お………♡♡♡お………♡♡♡お………♡♡♡」

お腹が煮えたぎるように熱くて、ふわふわして、頭がぼーつとして、視界が霞んで。

何も考えられない。子宮に全意識が集中して勝手に腰が持ち上がってっ♡

「おっ♡おっ♡おおおっ♡んっ♡おっ………ッ♡」

ほかあ♡と足を開いて、ただただ、夢中でへこお♡へこお♡と腰をへこつかせる。

まるで、別の誰かに身体を乗っ取られたみたいっ………♡

「っは♡これきもちーよな♡あっという間に、ポルチオアクメまで覚えちゃって……♡子猫ちゃんのまんこ雑魚すぎ♡」

「わっ♡わらひっ♡ぎこっ♡なんかじゃないい♡」

「へ♡んじゃもーちよつとがんばろ？」

とちゅ♡すりすりすり……♡とちゅ♡とちゅ♡とちゅ♡

ぞりい♡♡ぐりぐりずり♡ずり♡

短いストロークでポルチオをとん♡ノックされ、肛孔へ深く沈んだ指を抜き差しされる。

抵抗する肛肉を押し込み、ぬぢやぬぢやと自分の愛液をすり込まれてっ♡おまんこみたいに揉みほぐされてっ♡

柔らかく蕩けたポルチオをぐう♡と上へ押し上げられてっ♡

もお前と後ろの感覚がごちゃ混ぜになってっ♡わけわかんないっ♡

♡

「っ♡ゝゝ………っ♡♡♡♡っ♡う♡うゝゝ♡ううううううゝゝ………ッ♡♡♡♡」

もう唸り声しか出て来なくて、ひたすらにがつくん♡がつくん♡と腰を振りたくる。

(イキたいっ♡イキたいっ♡イキたいっ♡)

「すっげゝ♡口から涎垂れ流してっ♡がに股で腰カクつかせて♡ほんつと、子猫ちゃんつてばマゾメスの才能ありすぎ♡」

「ほら……イケ……♡イケイケイケ♡♡子宮まんことケツまんこヒクつかせて♡やーらしく雑魚アクメしろ♡♡」

とどめみたい、に、耳元で低く囁かれる。

どつ……♡とせりあがった塊が弾けて、怒濤のように身体中を駆け巡った。

「~~~~~♡ひ~~~~い~~~~♡ん~~~~う~~~~う~~~~」

「ツ」
♡
♡
♡
♡
...

びくびくづづ♡

ぽかあ♡と足を大きく開いて、だらしなく腰をへこ尽かせてイクツ



「すっげ……♡エロすぎてチンイラしてきた……♡子猫ちゃん、やっぱり俺の見込んだとおり天才なドマゾだわ♡」

くつたりと寝転がっている私を腹ばいにさせ、ぴとり、と股間に熱
硬いものを押しつけられる。

「……………？ は……………へ……………？」

「ちよつとイジめすぎちゃったから、寝てていいよ♡そのまま、俺が
チンポ挿れちゃうから♡」

「え……………あ……………？ ふえ……………？ あ……………あ…………………………♡」

ずにゅううううう♡

腰を持ち上げられて、そのままおちんぽをねじ込まれる。

（……………♡うそ……………♡おちんぽ♡もお入って……………♡）

ぷっくり♡広がった肉傘がおまんこのナカを掻き分けて、ずぶずぶ
と沈んでいく。

逞しい腕で抱きしめられて♡ガッチリホールドされて逃げられな

いっ♡

(アルヴィンの短小チンポとは全然違うっ♡おつきくてっ♡ぷりっぷりの亀頭が張り出してっ♡竿はぶっとくてっ♡ナカっ♡みぢみぢに埋め尽くしてゐるうううう♡)

ぱんっ♡♡と張り出したカリがずろろろ……♡とお腹の裏を撫でて

ごちゅんっ♡

「……ッ♡」

一直線にポルチオをノックされ、がつくんっ♡と身体が跳ねた。

(いっ、一気に奥までっ♡どちゅられる、なんてっ……♡)

「さっきたっぷりほぐしたから、柔らかくなってるな♡」

とっちゅ♡とっちゅ♡とっちゅ♡とっちゅ♡

存分に蕩けた子宮口に亀頭がめりこんで♡直接子宮を犯されてるみたい♡♡

「はへえ♡ん♡♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡……♡ツ♡」

ぞわあ、あ♡と背筋が甘く痺れる。

オリヴィエの優しい、
 労るようなピストンとはまるで違う。

荒々しく私の中を蹂躪して、ぐつちやぐつちやに引きずり出されて

メスの悦びを強制的に叩き込まれるみたい♡

な〜に〜？ 自分から足折り曲げて尻突き出して♡子宮のナカまで

「どちゅどちゅ♡して欲しいわけ？」

「い……っ……る……ッ♡あ……ゝ……あ……ッ♡あ……」

ツ
♡
└

ぎゅうう♡とシーツを掴んで、ぴとりっ♡と自分から股間をリシ

ヤールの股間に押しつける。

（わっ♡私っ♡なんでっ♡こんなっ♡卑猥な格好してっ♡はしたないっ♡）

「すごー発情期の牝犬みたいだな♡いや、子猫ちゃんはメス牛か？
こんなカッコでおねだりだなんて、やっぱリドマゾの変態だな♡」

言葉が口からうまく出てこなくて、ただひたすらにプルプルと首を横に振り続ける。

頭の芯が溶かされて、何も考えられない。本当に、獣になっちゃったみたい♡

「おらっ♡お望み通りケダモノみたいに犯してやるよっ♡」
ずしんっ♡

のし掛かられて下半身に目一杯体重を掛けられる。

「~~~~~……ッ♡♡♡♡ば……い……っ…………♡♡」

（だめええ♡これだめええ♡おちんぽずっしり重たい♡ずんずん♡つて♡子宮押し上げてるうう♡）

ぐっちゅ♡ぐっちゅ♡ぐっちゅ♡ぐっちゅ♡

お尻を押し潰すように激しく股間をたたき付けられて、がつくん♡がつくん♡と糸が切れた操り人形みたいに身体が跳ねる。

逃げる私を抑え込むように、更にリシャールが覆い被さって抱きついて、ぱんぱんぱん♡とひたすらに腰を打ち付けてくる♡

入り口からGスポ、ポルチオまで一直線に挟られて♡おまんこの奥がねじれるくらいきゅーきゅー窄まって♡

愛液と汗と体臭が混ざり合って、むせかえるような匂いが部屋に充滿して♡

媚薬みたいに鼻腔に流れ込んで♡頭がくらくらしってきた♡

「♡………♡♡♡♡あ♡………♡♡も……♡♡むりいい♡ひぬ♡うう♡ひんじやうううう♡」

「は♡ひゅーひゅー喉鳴らして、もお息も絶え絶えって感じだね♡ん♡かわい♡」

とどめみたいにかり♡と耳を噛まれて、びっくん♡と背筋が波打つ。

「やああ♡だめえ♡ゆるひれ♡もおゆるひれええ♡♡」

「♡♡今日のところは勘弁してやる♡♡おら♡♡びゅーびゅーナカに射精してやるから♡♡子宮ダイレクトアタックでイケイケ♡♡」

どぶううううう♡びゆるるううう♡どくどくううう♡♡

「~~~~~ッ♡♡♡♡お……ッ~~~~~ッ♡♡♡♡んお
~~~~~♡おおおお~~~~~ッ♡つお おおお~~~~~

……ッ♡♡♡」

（ああああ♡ナカにいい♡あつついザーメンびゅーびゅー注がれて  
るうう♡）

圧倒的「雄」の特濃精子に征服されて♡私の子宮が♡メスの悦  
びに目覚めちゃってる♡

やばいつ♡こんなのふっのセックスになんて、戻れないよお

……♡

「は……っ……♡あ~~~~……やば……俺……沼っちゃうかも……

♡」

ぎゅう……♡とリシャルが私にしがみついて、ぼそりと呟く。

熱に浮かされてぼやけた意識では彼の言葉尻を捉えられなくて。  
ただ、彼の重みの心地よさにうつとりしたのだった。

「やべ……ノンビリしてたら寮の門限ヤベーかも！」

部屋に備え付けのシャワールームで、二人でシャワーを浴びたあと。  
リシャルは私の髪や身体をタオルで拭いたり、寝間着を着せてくれたりと甲斐甲斐しくお世話をしてくれた。

「申し訳ありません……私の身支度をさせてしまったせいで、遅くなつてしまつて……」

「や、俺がやりたくてやつただけだから気にしないで。女の子の世話焼くの、好きなんだよね」

なんて屈託なく笑う彼の笑顔は、さつきまでのオラオラとドSに私を攻めていた彼と同一人物とは思えない。

「じゃ、そういうわけで俺帰るわ。また明日やろーな♡」

「お、お手柔らかにお願いします、リシャール様」

私の言葉を封じ込めるように、唇に指を押し当てられる。

「リシャール」

「はい？」

「様はいらないから、呼び捨てにして？」

「は、はい……リシャール……ル」

おずおずとそう呼ぶと、リシャールはにかつと笑って、私の髪をくしやりと撫でた。

「よしよし♡イイコだな♡子猫ちゃん♡次はもうつと気持ちよくして

やるから。まんこだけじゃなくて、アナルにも挿れような♡」

「う……それは……ちよつと……」

「も♡顔は『挿れたい♡』って言ってるぞ？」

（言っていないよお……）

もうすっかり彼のペースに巻き込まれっぱなしだ。

でも……それを心地よいと思っっている自分がいる。

「じゃ、そういうわけでまたな！」

リシャールは窓を開けると、ひょいっと框に足を掛け、そのまま壁を滑り降りてしまった。

「……すご……軽業師みたい……」

植え込みへ降りたりリシャールがこちらを見上げ、ブンブンと手を振

ってくる。

私は苦笑しながら、彼に手を振り返した。



第三章 どっちにするの!？ 双子に迫られ授業中にクリとアナル虐められてイキ我慢大会っ♡

今日は久しぶりの座学の日。

珍しくオリヴィエもリシャルも用事があるということで、行為室でのセックスはお休みだ。

(こうやって講義室の席に座るのも、久しぶりだな……)

ついこの間まで、みんなと一緒にこの席に座って先生の講義を聞いていたのが、遠い昔のように思える。

——オリヴィエとリシャルとのセックスバトルが始まって、一週

間ほどが経った。

オリヴィエにはひたすらクリトリスとおまんこを愛されて、リシャルにはアナルとおまんこを可愛がられる日々。

登校するたびに、クラスメイトや見知らぬ学園生たちから「どっちを選ぶの!？」と問い詰められるけれど。

（選べるわけじゃない……っ！）

まだ一週間しか経っていないからというのもあるけれど。

二人ともそれぞれに違う魅力があるし、何と言っても……

（セックスが気持ちいいんだもの……！）

お互いに縄張り意識でもあるのか、私を開発する場所が違うところもどちらかに決め難い原因となっている。

オリヴィエを選べばアナルを捨てることになり、リシャルを選べ

ばクリトリスを捨てることになる……

二人によつて全身くまなく性感帯にされてしまった私には、どちらか一人を選ぶなんてとてもできない。

（優柔不断なのかなあ……二人ともそばにいてほしいなんて、やっぱりずるいよね……）

「ねえ、隣いいかな？」

ぼんやり考えていると、誰かに声をかけられる。

「あつはい、どうぞ——」

顔を上げると、オリヴィエが満面の笑みを浮かべて私の横に立っていた。

「おつ、オリヴィエ様!? どうしてここに……」

「思いのほか用事が早く終わったから、一緒に講義を受けに来たん  
だ」

「こつちも、失礼するぜ♪」

反対側からは聞き慣れた声。横を向くと、既にリシャルが私の隣  
にちゃっかり座っている。

「リ、リシャル……!!」

「……ふうん、君はリシャルのことは呼び捨てなんだね。僕には相  
変わらずよそよそしいのに……」

（オリヴィエが拗ねてる……!!）

「いつ、いえそのつ……! リシャル……様が……つ、フランクに  
接してくれとおっしゃるので……」

「兄貴と違って、俺は親しみやすいから」

リシャルは後ろで手を組み、ぎっこぎつことイスを揺らして皮肉っぽい笑みを浮かべる。

オリヴィエも笑顔で応じているけれど、目が笑っていない。

（うう、なんだか私の胃がチクチクするう……）

「お、お二人と一緒に座学を受けるのは、初めてですよね！」

どうにか場の空気を和らげようと、二人を交互に見て明るい声で話しかける。

「そうだね。実は、もうすでに全てのカリキュラムを終えているんだけど、君が授業を受けると先生から聞いて、おさらいするのも悪くないかなと思って」

「俺は、アンタに会いたくて来たんだけどな。なあ、そろそろどっちにするか決めた？」

リシャルに言われ、ぎこちなく首を傾げる。うわあ、嫌な予感が  
ビンビンするう。

「どっち……とは……？」

「俺と兄貴、どっちと婚約するか決めたかつて聞いてんの」

リシャルがずい、と身を乗り出す。

「僕も聞きたいな。僕たちそれぞれとセックスしたんだし、相性は大体つかめたんじゃない？」

オリヴィエもぐつと私へ顔を近づけてニコニコと笑いかける。完全に逃げ場を塞がれた感じだ。

そして、講義室内の生徒の視線が私たちに集中しているのも、ビシビシ感じる。

皆私の答えを今か今かと待ち受けているのだろう。

（ややややめて……！　ただでさえプレッシャーに弱いのに……！）

「ま……まだお二人とは一回しかしてませんし、もつと親交を深め合つてから決めても遅くはないと……」

「そんなの、一回やればだいたい分かるだろ？　たとえばチンポの形はどっちがまんこに馴染むか……とかさあ」

リシャルらしい、本能に忠実な意見だ。一方オリヴィエは――

「もちろんそれも重要だけれど、大切なのは考え方や性格の相性じゃないかな。いくらセックスが気持ち良くても、心が通じ合っていないと意味がないし」

……うん、オリヴィエならそう言うと思つてた。

そして私はといえば、

「ど、どちらも、とても大切だと思いますわ。おほほほ……」

なんて、営業スマイルでごまかすしかないんだけど。だって、本当に決められないし。

ところがリシャルは引き下がらない。

「じゃあ今の時点でどっちに傾いてるかくらい、教えろよ」

なんてぐいぐい迫ってくる。

（リシャル、やけにこだわるなあ……）

なんだかんだ言つて、オリヴィエに対抗意識があるのだろうか。

「で、ですからそれは……」

「皆さん、席について。講義を始めますよ」

クロフォード先生が教壇へと上がる。良かった、天の助け！

「せつ、先生がいらっしゃったので……それについてはまた後で。さ

あ、授業の準備をいたしましたよう！」



そそくさと教科書を取り出してパラパラとめくる。

二人は顔を見合わせて肩を竦めると、それぞれ準備を始めた。

「——ですから、セックスにおけるキスの役割というのは、単に快感を得るだけではなく、互いの気持ちを高め合い、愛情を確認するための大切な行為なのです」

（はあ……まさか、あんなにグイグイ来られるとは）

ノートにペンを走らせながら、さっきのことを思い出す。

セックスが気持ちいいから選ばないっていうのもあるけれど、

（二人とも傷つけたくはないもの……）

思いやりにあふれ、温かく包み込むような愛を注いでくれるオリヴィエ。

粗雑に見えるけれど、根は優しいリシャル。

彼らと過ごす時間はとても心地良くて、一緒にいると素の自分を見ることが出来る。二人とも失いたくない……なんて思ってしまう。

（でも……いずれは決めないといけないんだよね。どうしよう……）

「……！」

すす……つと両脇から胸元に指が這う。

左右に視線を巡らせると、オリヴィエとリシャルが私のブラウスの中に、指を潜り込ませている。

「お……つ、お二人とも何を……つ」

小声で講義し、にらみ付ける。けれど、彼らは知らんぷりだ。

「そんなエッチな匂いプンプンさせておいて、何もしないわけないだろ」

「今日はまだ君に触れていないから、隣に座っていると、我慢できなくなっちゃって」

「だ、ダメです。今は講義中………ッ」

かり♡かり♡かり♡かり♡

両脇からノーブラの乳首を指で引っ掻かれ、悶絶しそうになる。

（だ、だめえ♡ここであつちな声を出したらっ♡みんなにっ♡気づかれちゃう♡）

「……ね、これ、君のために特別に仕立てたんだ。すつごく気持ちいいらしいよ？」

オリヴィエがピンク色の、小さくて丸い物体を取り出す。

「そ、それは……？」

「使ってみたら分かるよ……♡今、嵌めてあげるからね♡」

オリヴィエは私の太ももに手をかけてはかあ♡と開かせる。

そして、半分皮を被りかけたクリトリスを摘まんで、きゅっ……♡  
とそれを嵌めた。

「……ふえ？　な、何を……」ツ♡

にゅ……ぽんっ♡にゅるう♡にゅるうううう♡

「~~~~いッ♡~~~~う、あづ♡~~~~いええ~~~~ッ!？」

びくんっ♡と腰が大きく揺れる。

ゴムみたいに弾力を持った物質で出来たそれは、中に無数のイボイボがついていて、ちゅうちゅうとクリトリスに吸い着いてくる。

「ふふ、すごいでしょ？　これ『クリオナホ』って言うんだよ。ちんぽみたいにクリをシコシコ♡出来て気持ち良くしてくれるんだ。君は使ったことないみたいだね？」

ゆっさ♡ゆっさ♡ゆっさ♡ゆっさ♡

指先でクリオナホをリズムカルに揺すられ、がつくがつくと腰が揺れる。

温かなジェルをたっぷり♡塗られたオナホに包まれて、もみくちやにされたクリがどんどん神経を尖らせて敏感になってる♡

「~~~~~………いッ♡う………♡………え………く………う………♡ふう♡う♡ふう♡う♡う♡う♡う♡う♡」

気を抜くとえつちな声がダダ漏れになってしまいそうで、必死に歯を食いしばる。

ふーっ♡ふーっ♡と荒い息と共に、口の端から唾液がたらたらと垂れ落ちる。

にゅっぽ♡にゅっぽ♡にゅっぽ♡にゅっぽ♡

くると円を描くようにオナホを回されて、イボイボに擦られて  
どこもかしこも舐め回されてっ♡

根元からちゅーちゅー吸われてっ♡クリがちんぽみたいに伸びちや  
うう♡

「オナホを揺するたびに、ぬちやぬちや♡ってイヤらしい音が聞こえ  
てくるね……♡中で勃起クリもみくちやにされて、皮もズル剥けにな  
っちゃって……♡すっごくえっちな姿になっているんだろぅなあ♡あ  
あ、見られないのがとても残念だよ」

「兄貴のクリフェチぶりには感心するぜ♡んじや、アナルは俺が貰う  
から♡」

リシャールは身を屈めて床へ潜り込むと、私の股間に顔を埋めた。

「……ッ!? リシャール待つて……——くく………ッ♡」